

1 【解き方】 問一. a. 助動詞に含まれる「む」は「ん」にする。b. 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問二. ②「御相伝浮けることには…おぼつかなくぞ」は、「或人」の言葉である。④「道風が書ける和漢朗詠集」を持っていた人がそれをますます秘蔵したということであり、その持ち主が主語となる。

問三. 四条大納言が編集したものを、四条大納言よりも前の時代の小野道風が書き写したということが、時代が合わず矛盾していることから、「おぼつかなくぞ」と言っていることをおさえる。

問四. 「有がたき」は、めったにないということの意味する語。そのことから、ますます秘蔵するに値すると言っていることをおさえる。

問五. 時代が合わないあやしい物を、だからこそ秘蔵するに値すると言うような、一般的には考えにくいことを言う人である。

【答】 問一. a. かかん b. あわず 問二. ②ウ ④ア 問三. a. エ b. イ c. ク 問四. イ 問五. ウ

◀口語訳▶ ある者が、小野道風が書いた「和漢朗詠集」といって持っていたのを、「(あなたの) 家に伝わるもので、いいかげんなことはないでしょうが、四条大納言が編集なさった物を（それ以前に亡くなった）道風が書くというのは、時代が合わないでしょう。こころもとないことです」と言ったところ、「ですからこそ、世の中にめったにない物でございます」と、ますます大切にしまっておいた。

2 【解き方】 問一. a. 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。b. 「au」は「ô」と発音するので、「なう」は「のう」にする。

問二. 旧暦では一月～三月が春、四月～六月が夏、七月～九月が秋、十月～十二月が冬。

問三. ④「心」は、おもむき、風情という意味。⑥「べう」は、「べく」のウ音便。「言ふべう（べく）もあらず」は、言いようもないという意味。

問四. イは連体修飾語をつくる働き。ア・ウ・エは主語を示す働き。

問五. 「木の花は…」 「桜は…」 「藤の花は…」 と三つの文を並べて述べているので、「藤の花は…」の末尾「いとめでたし」が他の文にも共通すると考える。

問六. 橘はミカン属の高木。その果実を「黄金の玉」に見立てている。

問七. 本文では、紅梅、桜、藤、橘と、複数の木の花をあげ、それぞれの形状や色の風情を述べている。

【答】 問一. a. おおき b. のう 問二. (よみ)うづき (季節)夏 問三. ②ウ ③ア ④ウ ⑥エ 問四. イ 問五. いとめでたし 問六. エ 問七. ア

◀口語訳▶ 木の花は、濃いものでもうすいものでも、紅梅がたいへんすばらしい。桜は、花びらが大きくて、葉の色の濃いものが、枝は細くて咲いているのがたいへんすばらしい。藤の花は、しなやかにたわんでいる花の房が長く、色濃く咲いているのが、たいへんすばらしい。四月の最終日か五月の初日のころ、橘の葉が濃く青いところに、花がたいへん白く咲いているのが、雨が降った翌朝などは、この世に類がないほど風情がある様子で趣深い。花の中から実がまるで黄金の玉であるかのように見えて、たいへんくっきりと見えているところなどは、朝露にぬれている明け方の桜に劣らない。ほととぎすが好んでよく止まる木だと思ふからであろうか、やはりあらためて言うまでもなくすばらしい。

- 3** 【解き方】 問一. 声を聞いた莊子が振り返ったところ、「車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく」と述べている。
- 問二. ② 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。⑤ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にし、「eu」は「yô」と発音するので、「けふ」は「けう」となり、「きょう」にする。
- 問三. a と b は、前に「鮒の曰く」とあるので鮒。c は、「莊子の曰く」に続いている一連の中での「我」なので莊子。
- 問四. 「落ち入りたる」とあるので、鮒が落ちてばたばたと跳ねている場所をおさえる。
- 問五. 「え」という副詞は、後に打消の語を伴って「～できない」という意味になる。「まじ」は、打消推量の助動詞で「～ないだろう」という意味。
- 問六. 「知り」は連用形なので、「ぬ」は完了の助動詞。
- 問七. 前に「けふの命、物食はずは」とあることから考える。
- 問八. ものを食べられずに死んでしまい、その後になって「千の金」をもらっても、「益なし」と述べていることに着目する。
- 問九. 鮒が「喉渴き死なんとす」と訴えていることから、その鮒が今すぐに求めているものを探す。
- 【答】 問一. 鮒(が) 莊子(を) 問二. ② とえば ⑤ きょう 問三. c 問四. 車の輪跡の～りたる少水 問五. エ 問六. ウ 問七. 生(く) 問八. 全く役に立たないこと(または、意味をなさないもの) (10字, または9字) (同意可) 問九. 一提ばかりの水

◀口語訳▶ 莊子が言うには、「昨日道を通ったら、後ろの方で呼びかける声があった。振り返ると人はいなかった。ただ車のわだちのくぼんだ所にたまった少しの水の中に、鮒が一尾ばたばたと跳ねている。どうしたのだろうかと思って寄って見ると、少しばかりの水の中にとても大きな鮒がいた。『どうしたのだ』と問うと、鮒は、『私は河の神の使いで、江湖へ行くのです。それが飛びそこなって、この溝に落ちてしまったのです。喉が渴いて死にそうです。私を助けてほしいと思って呼んだのです』と言った。莊子は答えて、『私はあと二三日したら、江湖という所遊びに行く予定です。そこに運んで行って放しましょう』と言うと、魚は、『とてもそれまでは待てないでしょう。ただ今日提に一杯ばかりの水で喉をうるおしてください』と言ったので、そうして(鮒の言うとおりにしてやって)助けた。鮒の言った事は、わが身のこととして思い知った。今日の命は、物を食べなければ生きることができない。後で千両の金をもらってもまったく役に立たない』と言った。それから、「後の千金」という事が有名になった。

4 【解き方】 問一. ア. 「ぢ」は「じ」にする。イ・ウ. 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問三. A. 直後の「これを見て、驚きて車の後に走り寄りて」に続くので、「歩にして車の後」にお供していた人物。B. 「車の後に走り寄りて」「起して告げければ」とあることから、「車の内」で寝入っていた人物。C. 後の「驚きて覚めて」に続くので、「車の内」で寝入っていて起こされた人物。

問四. 晴明は、「賀茂忠行」から「この道」を習ったとある。

問五. ア. 「賀茂忠行と云ひける陰陽師に随ひて、昼夜にこの道を習ひける」とある。イ・ウ. 「鬼の来たるを見て、術法を以てたちまちに我が身をも恐れ無く、共の者どもをも隠し、平らかに過ぎにける」とある。この行動を取ったのは、「車の内」で寝入っていて起こされた忠行。エ・オ. 「その後、忠行、晴明を去り難く思ひて、この道を教ふる事、瓶の水をうつすが如し」とある。

問六. イは成立時期不明（鎌倉時代という説あり）、ウは鎌倉時代、エは江戸時代の成立。

【答】 問一. ア. はじず イ. ならいける ウ. えもいわず 問二. イ 問三. A. 晴明 B. 忠行 C. 忠行  
問四. 陰陽(道) 問五. ア. × イ. × ウ. ○ エ. × オ. ○ 問六. ア

◀口語訳▶ 今となっては昔のことだが、天文博士である安倍晴明という陰陽師がいた。古い家柄の者にも見劣りしない、優れた人物であった。幼少の頃より、賀茂忠行という陰陽師に師事して、昼夜を問わず陰陽道を習っていたのだが、全く頼りないということが無かった。

そのようにして、晴明が若かった頃に、師匠の忠行が下京へ夜歩きに行ったのにお供して、歩いて牛車の後をついて行った。忠行は、車の中でよく寝入っていたのだが、晴明が見ると、なんとも恐ろしい鬼たちが、車の前方から向かって来る。晴明はこれを見て、驚いて車の後ろに走り寄って、忠行を起こして事情を告げると、その時に忠行は驚いて目を覚まして、鬼が来ているのを見て、法術を使ってすぐに自分の身を隠し、お供の者たちも隠して、何事も無く通り過ぎることができた。その後、忠行は、晴明を手放したくないと思って、陰陽道を教えることにおいて、瓶の水を移すように余すところなく（晴明に）伝えた。そういう訳で晴明は、陰陽道において公私共に重用され、優れた陰陽師となったのである。